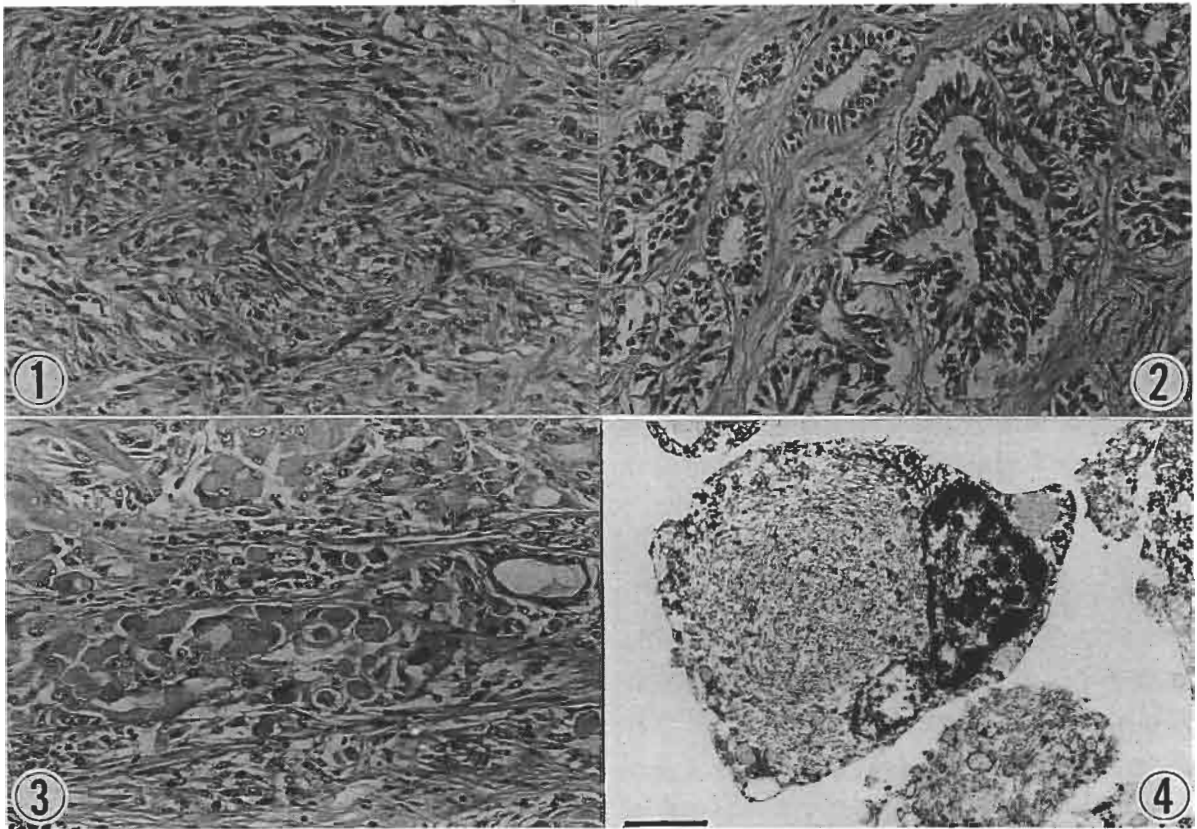


# 豚の卵巢周囲腫瘍

鹿児島大学農学部家畜病理学教室出題 第36回獣医病理学研修会標本No.668



動物：豚（F1肥育豚），雌，6カ月齢。

臨床事項：体格および発育ともにやや不良な程度で生体検査では特に異常なく，と畜場においてと殺解体。

剖検所見：右卵巢に連続して線維性被膜で被われた直径約10cmの硬固な球状乳白色腫瘍が認められ，割面は黄色および乳白色の斑状模様を呈し，中心部は壊死融解。左卵巢は卵巢門から卵巢間膜にかけて肥厚した部位があり，さらに左右の卵巢間膜，卵管間膜および子宮広間膜に大豆大の小腫瘍が散在。しかし，左右卵巢，卵管，子宮，膣，外陰部に変状はなし。腹膜と消化管漿膜は乳白色硬固な組織で一面が覆われ，さらに腎臓周囲，副腎周囲，膀胱漿膜面，横隔膜両側，縦隔膜，肺表面から実質にも同様の組織があり，肝臓および脾臓の表面にも僅かに存在。

組織所見：卵巢門から卵巢周囲腫瘍にかけて，紡錘形腫瘍細胞の瀰漫性肉腫様増殖と上皮性管状増殖。腫瘍細胞は細胞質に乏しく，クロマチンに富む比較的均一な核を有し分裂像が散見。肉腫様増殖部は，母組織が明確となるような配列はなく，微細な膠原

線維間に浸潤性かつ瀰漫性に腫瘍細胞が増殖（写真1・H E染色）。上皮性管状増殖部は，紡錘形腫瘍細胞が細胞質の一端を管壁に附着させて単層に配列する多数の管腔が存在（写真2・H E染色）。さらに，腫瘍細胞が円柱上皮様を呈して単層に配列し，管腔内には弱酸性水様貯留物や，豊富な細胞質を有する類円形から多形の大型腫瘍細胞も存在（写真3・H E染色）。水様貯留物および細胞質はPAS陽性，アルシアンブルー弱陽性。免疫染色では腫瘍細胞はケラチン陽性で，大型腫瘍細胞はより強く陽性。他の腫瘍においては，紡錘形腫瘍細胞と大型腫瘍細胞の混在する瀰漫性肉腫様増殖が主体で，管腔形成はない。電顕においては，腫瘍細胞は明瞭な接着構造がなく，表面に微絨毛も見られない。大型腫瘍細胞は細胞質に多くの中間径フィラメントを有する（写真4・Bar=2 $\mu$ m）。

診断名：豚の悪性中皮腫。

考察：鑑別が必要であるミューラー管由来同所性癌肉腫としての十分な特徴を有していないため，二相性増殖を呈する悪性中皮腫の変異型と考えられた。